専念寺通信

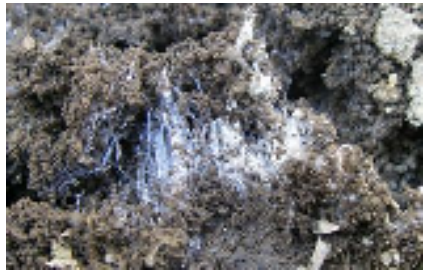
二月号（NO．１２６）

http://sennenji.s296.xrea.com/

きびしい寒さが続いています。皆さま、お変わりありませんか？

☆如月　今年も、はや如月、左はお正月の名残の千両です。残りの写真はお墓の霜柱です。右下の写真は墓地を入ったところですが、ある朝、いったい何が起きたのだろうと思えるほど、土が盛り上がっていました。墓地の中も、あちこちで踏み石より高く土が盛り上がっています、一部をそっと手ではがすと、右上のように美しい細い霜がきれいに行列しています、この細い一本一本が墓地の土全体を押し上げているのだ、と目をこらしてみたことでした。

☆日本を語る　１月号は法然上人の言葉をご紹介しましたので、今号は、最近読んだ興味深い記事について紹介させて頂きます。昨年、政権が変わってからも、どうも私たちの暮らしはよくなっているように思えません。福祉、外交、巨額の借金、などなど。外国人記者の見た日本、「ル・モンド」誌のフィリップ・ポン氏の記事の一部です。氏は今述べた諸問題に触れたのち、こう書いています。「しかし、この国では民間や公共のサービスの良さが生活の質の向上に結びつき、誰もが恩恵にあずかっている。交通機関の清潔さと便利さ（ラッシュアワーの混雑はさておき）都市部における身障者用の設備の充実、豊富なタクシー台数、２４時間営業で、買い物のみならず小包もおくれば公共料金の支払いもでき、銀行のＡＴＭが備わっているコンビニ、フルサービスのガソリンスタンド、清潔でいたるところにある公共トイレ、そして一般的にいえる従業員の親切さ。日本の日常はこうした要素に満ちている。グローバル化された未来の世界に魅惑を感じる人の目には、すべては単なるディテールとうつるかもしれない。しかし大多数の人にとって日常とはさまざまなディテールでなりたっているのだ。日本は強固な制度を備えた民主主義国家である。うまくいっていない部分もあるが、日本は不況という逆境に耐えているし、犯罪率も世界で最も低い水準を保っている。技術革新ではトップとはいえないがＧＤＰの３．６％を投じている研究開発は進歩し続けている。３０年間でエネルギー効果を４０％改善させた省エネの分野、あるいは今後の鍵となる環境関連技術の分野で日本は先頭を走っている。」フランスの元経済財政産業大臣クリスチャン・ソテール氏の言葉。「日本は、相互補完的な２つの経済形態を組み合わせた発展へと向かっている。ひとつは研究開発にうら付けられたグローバル経済、もうひとつは生産性も賃金もさほど高くない地域経済で、そこでは高齢者も主婦も学歴の高くない若者も受け入れてくれる。」「経済的成熟に達し、グローバル経済競争の熱狂からある程度距離を置いた日本が、低成長の利点を知っているという点で前衛的だとしたらどうだろう。」「停滞する日本に利があるかもしれない。」と記者は締めくくっています。紙数に限りがありますがイギリスの「ガーディアン」誌から。スティーブン・ヒル氏の記事です。「米国の失業率は１０％を越え、４７００万人の国民が健康保険の庇護の外に置かれている。一方で、失業率は５％、所得不平等の程度は国際的にみても最低水準、国民皆保険を実施し、世界最大級の輸出国、しかもこの国は平均寿命も世界最高水準、乳幼児死亡率は低く、基本的計算力や識字率もトップクラス、犯罪、殺人率は低く、薬物乱用の件数は少ない。炭素排出量も少なく、地球温暖化抑止に一役買っている。これらいずれの点でもこの国は米国や中国をはるかに引き離している。この国はどこか？日本である。」そして結論は「いま本当に問題なのは、何が何でも経済成長を達成することでなく、持続可能性を追求し、少ない資源から多くを引き出すことである。」



これらの論評を読むと、逆に他の先進国が抱えている問題がよく分かります。私たちは自分の国の問題について考えながらも、もはや私たちの国の美点について述べずにいられない「先進国」のおちいっている状況について想像することはできます。まだ失っていない善いものを大切に、一歩一歩、静かに歩いていきたいものです。

平成２３年２月１日　大黒